19　次の文章は浅田次郎の「にて」の一部分である。四十六歳の貫井恭一が八歳の時の出来事を回想している場面である。よく読んで、後の問に答えよ。 　　　　　　　　　　　　　　　　　　〈岡山大〉二〇一九年度出題

　「恭ちゃん、寿司でも食おうか」

　角筈のバス停に降り立つと、父はマのを上げて夕空を仰ぎながらそう言った。

　「ねえ、おとうさん。の長嶋は来年ジャイアンツに入るんだって、ほんと？」

　「さあね。そんなこと、わからないよ」

　手を引かれて信号を渡りながら、恭一は父との会話を探していた。父のもう片方の手にげられたボストンバッグが、⑴爆弾のように思えてならなかった。

　通りを渡りきると、父は困惑しきった表情であたりを見回し、メガネをはずして汗をった。何かにしているふうだった。

　中野からのバスの中で、ずっと考え続けていたせりふを、恭一は口にした。

　「あのね、おとうさん。ぼく、新しいおかあさんがきてもいいよ。あのおねえさん、きれいじゃないか。おかあさんよりも、若くてきれいだよ─ねえ、そうしてよ」

　それは、⑵せりふだった。父が何度か家に連れてきた女を、きれいだなどと思ったことはなかった。のような目をした、唇のんだ女だった。恭一と目が合うと、女はきまってチェッと舌打ちをし、顔をそむけた。

　おぞましいせりふを口にしたとたん、恭一は目をつむって、死んだ母にびた。

　「そうかい。でも、あっちはおまえのことがあんまり好きじゃないらしい」

　「どうしてさ。ぼく、何もしてないよ」

　「いや、子供が好きじゃないんだ」

　父は言いながら、東口の石造りの駅舎を振り返った。

　「寿司でも、食おうか。おなかへったろう」

　「へってないよ」

　寿司を食うことが、最後の儀式のような気がしてならなかった。食べたらそれでおしまいなのだと思った。

　「ねえ、おとうさん。あのおねえさん、どこかで待ってるの？」

　父の目はメガネの奥で一瞬ぎょっとみひらかれたが、じきにしい色に変わった。

　「どうして？」

　「ううん、べつに。そんな気がしただけ」

　父の麻の背広の肩には、汗がしみていた。

　バス停の前の寿司屋に入ると、何でも好きなものを食えと父は言った。

　止まり木に座って寿司を注文する作法を、恭一は知らなかった。黙りこくっていると、父は子供の好きそうなものを勝手に注文した。日ごろの様子とはちがうやさしさだった。

　泣いてすがれば、父の決心は揺らぐかも知れないと思った。だが、少年にもはあった。

　心とはうらはらに、のとろけるような寿司のさが悲しかった。

　「恭ちゃん、おまえ勉強だけはちゃんとしなけりゃだめだぞ」

　と、ビールを飲みながら父は、とうとう言い置くようなことを口にした。

　「おとうさんは勉強ができなかったからな。小僧に出されたし、兵隊にもとられたし、したくてもできなかった。だから今でも、みんなにばかにされる」

　「おとうさんはばかじゃないよ」

　本当は、子供を捨てるほどばかじゃないよね、と言おうとした。意味をみとってくれたかどうかは、わからない。

　「ばかさ。ばかだから会社もつぶしちまう。おとうさんは、ほんとは商売なんてしたくはなかったんだよ。気が小さいから、サラリーマンに向いてるんだ」

　「だったら、サラリーマンになればいいじゃないか」

　「サラリーマンは、大学を出なけりゃなれないんだよ。日曜は休みで、土曜はンだ。おまけに銭金の苦労をしなくていい」

　ラジオが物哀しい演歌を唄っていた。父は寿司を食わずに、ビールばかりを飲んだ。そして、いかにも思いきったように、こわいことを言った。

　「恭ちゃん、おとうさんはちょっと用事があるから、のおじさんの家に行ってなさい。角筈からバスに乗って、二つ目。わかるよな」

　そこは新宿からほど近い、父のの家だった。

　「ヤッちゃんもクミちゃんも夏休みだから、おとうさんが迎えに行くまで遊んでいればいい」

　恭一はとしてむことを忘れていた寿司を、やっとの思いでみ下した。

　「きょう、迎えにきてくれるの？」

　父は明らかに答えをった。

　「さあ……仕事のつごうだな。迎えに行けなかったなら泊まればいいじゃないか」

　「いいよ。ぼく、うちに帰ってる。うちで待ってるから、おとうさん、帰ってきてよ」

　おねがいします、と言いたかったが、声にはならなかった。

　「だめだめ、おじさんの家に行っていなさい。おとうさん、電話しておくから」

　それから父は、法外な額の小遣を都バスの回数券とともに恭一の手に握らせた。

　父とは、角筈のバス停で別れた。

　「なら、ここで待ってるよ。ずっと待ってるから、ここに戻ってきて」

　「わからんやつだな。きょうは帰れるかどうかもわからないって、言ってるじゃないか」

　「でも待ってるよ。最終のバスまで待ってるから、だから、なるたけ帰ってきて」

　たぶん、意思は通じた。父は宵の路上にみこんで、恭一の肩を抱いた。

　「やっぱりサラリーマンがいいな。恭ちゃんもしっかり勉強して、大きな会社に就職しなけりゃだめだよ」

　サラリーマンになれば、子供を捨てなくてもすむのか、と恭一は叫びたかった。

　父は行ってしまった。

　戻るはずのない父を、恭一は角筈のバス停で待ち続けた。

　街灯の白いあかりが、ぼんやりと赤や青のネオンを吸いこむほどの、湿った夜だった。はじめは行きう車を眺め、そのうち半ズボンのポケットにが入っているのに気付いて、舗道に戦の絵を描いた。

　⑶バス停のまわりにゼロ戦と戦艦の壮大な戦隊が出現しても、父は帰ってこなかった。

　食堂の店員にられた。店先にいたずら書きをしてしまったことを素直にあやまると、案外やさしげに、こんなところで何をしているのだとかれた。

　おとうさんを待っている、と言った。言いながら、言葉の苦さに唇を嚙んだ。父が戻るはずのないことはわかっていた。だが、もしそうなると自分はみなしごになってしまうのだから、待っているほかはないのだと思った。

　夜が更けて店が閉まると、店員は裏声でビリーを唄いながら、恭一の汚した舗道をデッキブラシで洗い始めた。シャッターを下ろしかけてうんざりと恭一を見、いちど店に入ってから冷えたラムネを持ってきてくれた。

　何台ものバスが過ぎた。乗客は次第に減って行った。一台をやりすごすたびに、恭一の心もうつろになって行った。からっぽのバスが来ると、胸もからっぽになった。

　行の最終が来た。わずかな乗客は、みな降りてしまった。

　「最終でえす――ぼく、最終よ。いいの？」

　折り畳みのドアを引きかけながら、車掌が身を乗り出してねた。バスに乗る前に、恭一はもういちど角筈の街頭を振り返った。

　店々の灯もあらかた消えた舗道には、野良猫が群れていた。

　淀橋の親類の家はの職人だった。

　バス停にはが迎えにきていた。父の電話があってから、二時間もそこに待っていたのだと伯母は言った。

　「ごめんなさい、おばさん」

　「恭ちゃんがあやまることじゃないよ」

　伯母はそれきり黙りこくってしまった。

　自分の身の上にいったい何が起こったのか、恭一はほとんど正確に知っていた。ただ、知っていることを悟られまいと、無知な子供を装った。

　「おばさん、立教の長嶋は、来年ジャイアンツに入るんだって。ほんとかな」

　「さあ……おばちゃん、わかんないよ。うちでおじちゃんに聞いてみな」

　伯母の手は母の温もりを思い出させた。

　を下って行くと、仕事場の前に縁台を出して、がビールを飲んでいた。いとこにあたる保夫と久美子が、をかかえて線香花火をのぞいていた。

　「あ、恭ちゃんがきた」

　寝巻姿の久美子がを鳴らして走ってきた。

　「恭ちゃん、これからうちの子になるんだって」

　「ばか言うんじゃない」と、伯母が強い声で叱った。

　「だって、おとうさんが言ってたよ。恭ちゃんちはおばちゃんが死んじゃって、おじちゃんがどこかへ行っちゃったから、恭ちゃんはクミコのおにいちゃんになるんだって」

　小さな久美子に腰を抱きしめられたとき、恭一は腕をに当てて、⑷初めて泣いた。

（浅田次郎「角筈にて」による）

注一　パナマ＝パナマ帽のこと。夏向きのぼうし。

注二　立教の長嶋＝長嶋茂雄のこと。当時、立教大学に在籍していた。

注三　半ドン＝仕事が午前中で終わること。

注四　ゼロ戦＝戦闘機の一種。

注五　ロカビリー＝主に一九六〇年代以降、若者を中心に日本でも流行した音楽。

注六　またいとこ＝自分からみて祖父母の兄弟姉妹の孫である。六親等の傍系親族の一つ。はとこともいう。

問１　傍線部⑴は恭一のどのような気持ちを表現したものか、比喩に即して説明せよ。

問２　傍線部⑵は恭一のどのような気持ちを表現したものか、本文の内容をふまえて説明せよ。

問３　二箇所の波線部は、ほぼ同じ内容の発言である。恭一がなぜこのように発言したのか、恭一の気持ちをふまえて説明せよ。

問４　傍線部⑶は恭一のどのような状況を表現したものか、書け。

◎問５　傍線部⑷で恭一が「初めて泣いた」のはどうしてか、恭一の気持ちを説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　Ａ旅立ちを表すバッグは父が自分を捨ててどこかへ行ってしまう事実を示し、Ｂ今の生活が失われる瞬間が来ることを予感して恐れる気持ち。

Ａ＝５〔ボストンバッグが何を意味しているのかを言い換えていること。〕

Ｂ＝５〔いつ爆発するかわからない爆弾への恐怖が、父に捨てられるという恐怖に言い換えられていること。〕

問２　Ａ父に捨てられたくない一心で、Ｂ新しい母を受け入れるという本心とはかけ離れたことをしゃべっているというＣ自己嫌悪の気持ち。

Ａ＝３〔恭一の必死さが述べられていること。〕

Ｂ＝４〔「本心とかけ離れた」という内容がなければ減点２。〕

Ｃ＝３〔心にもないことを話した恭一の苦悩、嫌悪感が表現されていること。〕

問３　Ａ前者は父との別れ話を避けるために世間話で会話を続けようとする必死な思いからであり、Ｂ後者は父に捨てられたみじめさを隠そうとする矜恃からの発言である。

Ａ＝５〔父に捨てられるという状況を知りながらもなんとか先延ばしにしようとする恭一の必死さが表現されていること。〕

Ｂ＝５〔父に捨てられたという状況を知っていることを隠そうとする恭一のプライドが表現されていること。〕

問４　Ａ父が戻ってくるはずはないとは知りながら、Ｂそれでも父親を信じたくて Ｃ長い時間待ち続けていたという状況。

Ａ＝４〔父が戻らないことを知っているという内容があること。〕

Ｂ＝２〔父にすがる気持ちが表現されていること。〕

Ｃ＝４〔長い時間が経過したという内容があること。〕

問５　Ａ父親に捨てられたという自分の置かれている状況を知りながら Ｂ同情されたくないという矜恃からずっと泣くことを我慢していたが、Ｃ無邪気な久美子の指摘によって Ｄこらえていた悲しみの感情があふれ出したから。

Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２〔自分の置かれている状況をちゃんと知っているという内容があること。〕

Ｂ＝２〔恭一の同情されたくないという「矜恃」の内容があること。〕

Ｃ＝２〔感情があふれ出たきっかけが表現されていること。〕

Ｄ＝４